

軟体動物

なんたいどうぶつ
軟体動物はやわらかい体もち、固い殻で身を守る巻貝や二枚貝、ヒザラガイなどと、殻をもたないウミウシ、イカやタコの仲間がいます。

ノッチ

コンペイトウガイ・イボタマキビ

タマキビガイの仲間は海面から離れたところで生活するグループです。コンペイトウガイはノッチの上、イボタマキビはノッチの中ほどで見られます。陽ざしを浴びてカラカラに乾いた岩礁で、じっと活動のチャンスを待っているのです。これらの貝は藻類を食べています。ノッチの表面にはあまり藻類が見あたりませんが、食べ物は足りているのでしょうか？

コンペイトウガイ殻長1.5cm／イボタマキビ殻長1cm



コンペイトウガイ

イボタマキビ

ウズラタマキビの仲間

マングローブ林でよく見られるウズラタマキビの仲間が岩礁にもすんでいます。殻の形はよくにしていますが、殻の色が灰色～紫色のものはコウダカタマキビ、白地に淡褐色のしま模様たんかっしょくがホソスジウズラタマキビ、ピンク色がテリタマキビです。ノッチの陰や岩の割れ目、くぼみに身をひそめています。雨が降ったりしづきがかかると、活発に動き回ります。港の防波堤にもすんでいますから、釣りに行った時などに探してみてください。

コウダカタマキビ殻長1.5cm



コウダカタマキビ

イシダミアマオブネ・キバアマガイ

コンペイトウガイがすんでいる所よりちょっと下のノッチの陰などでよく見つかります。貝の周りにはある薄茶色の細長いものは何でしょうか？そうこれは貝のフンなのです。これらの貝は、岩の表面に生えている小さな藻類を岩と一緒に削り取って食べているのです。それから、小さな白くて丸いものがたくさん見られます。これは、貝の卵の入れ物(卵のう)です。

イシダミアマオブネ殻長1～1.5cm

キバアマガイ殻長1～2cm



イシダミアマオブネ

キバアマガイ

ヘトリアオリガイ

潮間帯上部の比較的陸に近い場所で、岩のすき間にびっしりと群生しています。足糸という非常に強い繊維質で岩に固着し、荒波でも貼がされません。潮が満ちてくると貝殻を少し開いてえらの繊維毛で水流を起こし、海水を取り入れて呼吸するとともに、海水中の細かい有機物を濾しとって餌にします。このような二枚貝の集まりでは、貝と貝のすき間にいろいろな小さい生き物がすんでいます。

殻高3cm



オハグロガキ

岩場のごつごつした足元をよく見ると、一見岩にしか見えないような、黒っぽくてぎざぎざに波打つ二枚貝の口がたくさんあることに気がきます。これがオハグロガキで、食用のカキの仲間です。潮が引いてカラカラに乾燥する場所に、セメントで固めたように片方の殻を固着させています。素足で歩いたり転ぶとケガをしますのでご注意ください。ヘトリアオリガイと同様に濾過食性で、いわば海水を浄化する役目を担っている生き物です。

殻高6cm



ゴマフニナ

白黒まだら模様のとがった貝がたくさん集まっています。ゴマフ模様の貝(ニナ)であることからゴマフニナと呼ばれています。潮が満ちてくると散らばって、潮が引くにつれて、また集まってくるというリズムがあるようです。集まっている所にはどんな特徴があるのでしょうか？また、この貝は産んだ卵を殻の中で育て、ある程度大きくなった幼生を放出するという子孫の増やし方をしています。

殻長2.5cm



アマオブネ・ニシキアマオブネ

アマオブネの殻は半球状で、岩礁の割れ目などちょっと隠れた場所に集まっています。くもりや雨なら日中でも岩の上をはいまわって小さな藻類を食べています。この貝殻を口に当てて強く吹くと、笛として遊ぶことができます。打ち上げられて中身の無い殻で試してみましょう。一方ニシキアマオブネは、夕方潮が引き始めると、砂の中から現われてきます。ツルツルした殻にカラフルな模様が印象的な貝です。

アマオブネ殻長1~2cm
ニシキアマオブネ殻長1.5~2.5cm



リュウキュウノアシ・コウダカカラマツ

笠型の殻をもち、岩にはりついて暮らしている貝です。リュウキュウノアシは鳥の水かきのようなです。コウダカカラマツも形はよく似ていますが、よく見ると殻が左右対称でないことがわかります。実は両者は縁遠い関係で、コウダカカラマツは陸にすむカタツムリに近い種類なのです。どちらも岩の表面の藻類を食べ歩いて、食事の後は自分の家になっている岩のくぼみに戻ってくるという生活をしています。

リュウキュウノアシ殻長3.5cm
コウダカカラマツ殻長1.7cm



オニヒザラガイ

岩のくぼみにとげの生えた小判型の生き物がいます。よく見ると背中に8枚の殻板があります。イカやタコ、巻貝や二枚貝と同じく軟体動物という大きなグループをつくるヒザラガイの仲間です。岩にしっかりとはりついていて、なかなかはがすことはできませんが、小さな個体をうまくはがすと、巻貝のような足と口が見られます。観察が終わったら元に戻してあげましょう。

体長6cm



ヤタテガイの仲間

栗色くりいろの地に黄色の縦じまがある小さな貝です。よく探すと、しま模様のちょっとちがう貝が見つかるでしょう。実は、ごく近縁の種が同じような場所で生活しているのです。どの種もゴカイやホシムシといった岩を掘って住む動物を食べています。

コシマヤタテガイ (ナガシマヤタテガイ)
殻長2.5~3.5cm



コシマヤタテガイ

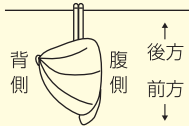
リュウキュウアオイガイ

二枚貝にも前後左右があるのをご存知ですか？二枚貝の多くは底質ていしつに潜るので、進行方向である下方が前、上方が後ろ、さらにちょうつがいのある方を背側、その反対側の殻が開く方を腹側といい、2枚の殻を右殻・左殻と呼びます。この貝は殻の後ろ側が平らにつぶれ、横から見ると三角形、後ろや前から見るとハート型です。岩のくぼみに平らな方を上にしておさまっています。実はこの貝は体内に植物かつちゅうそう（褐虫藻）が共生していて、光合成による栄養分をもらっています。

殻高4cm

アサリなどとリュウキュウアオイガイとの体勢のちがいを示す図

アサリなど



リュウキュウアオイガイ



側面

下面

タカラガイの仲間

美しい貝殻で、古代の中国では貝貨というお金として使われました。財や貨などお金の漢字に貝の字がつくのはそのためです。沖縄では漁網ぎよもうのおもりに使用されました。他の巻貝と違い殻全体に光沢があるのは、外套膜がいとうまくが殻をおおって真珠層しんじゆそうを作るから。この外套膜は、キイロダカラは縞模様しま、ハナビラダカラは黒いまだら模様で、殻とは似つかない派手な模様をしています。なお、キイロダカラの殻色には、白~黄色の地域変異ちいきへんいが見られます。

キイロダカラ殻長3.5cm / ハナビラダカラ殻長3cm



キイロダカラ

ハナビラダカラ

ヒメジャコガイ

方言でアジケー^{かいじょう}。塊状サンゴの死んだ部分や岩盤に、化学物質を出して溶かした穴を作ってすんでいます。貝殻の口にそって見える青や緑の美しいヒダは外套膜^{がいとうまく}といって、この中に褐虫藻^{かつちゆうそう}という植物プランクトンが共生しています。海水中のプランクトンや有機物を濾^ゆしとって食べる多くの二枚貝とはちがいで、シャコガイの仲間は太陽の光がとどく澄んだ水の浅瀬で生活し、光合成をする褐虫藻から栄養分をもらって成長します。 殻長15cm 殻高10cm



ムシロガイの仲間

一見何もいない潮だまりに、魚の切り身を投げ込んでしばらく見てみると、砂の中から小さな巻貝^{まきかい}が次々と現われてきます。水管を長く伸ばして左右に振り、すべるように進んで行きます。ムシロガイの仲間は普段は砂や泥の中に隠れていて、動物の死骸^{しかい}が流れ着くとすばやく出てきて食べ始めます。こうした「おそうじ屋さん」がいるおかげで、生き物の死骸はたちまち片付けられてしまいます。

イボヨウバイ 殻長3cm



イボヨウバイ

マガキガイ

方言でテラジャー。おいしい貝で、コマ貝という名で売られています。毒針をもつイモガイの仲間に殻の形が似ていますが、殻口部^{かくこうぶ}が赤く厚くなることと、殻口部の下側^{ふた}がカーブすることで区別できます。貝殻の蓋は爪状に変化して、砂地の上をひっかくようにして進みます。ゾウの鼻のような口を伸ばして岩の上に生えた小さな藻類^{そうるい}を食べます。クモガイや『水』という字の形に突起が伸び沖縄で魔除けに使われるスイジガイと同じ仲間です。

殻長6cm



ミミガイ

これも貝？とびっくりするような見かけをしていますが、じつはおいしいアワビの仲間です。貝殻は薄くなめらかで、殻の内側は虹色の光沢が非常にきれいです。殻が耳のような形なのでこの名がついたのでしょう。軟体部は大きくて貝殻の中におさまらず、殻を背中に乗せた格好で外套膜の触手をゆらめかせながら滑るように海底を歩きます。この仲間は、岩の表面に生えた藻類をやすりのような歯でけずりにとって食べています。

殻長12cm



ウミウシの仲間

ウミウシは、貝殻を失った巻貝のグループです。種類が多く、色彩や形が多種多様です。写真はドーリス科のゴマフリイロウミウシで、2本の触覚を持ち、背中に生えた房のようなえらで呼吸をしています。雌雄同体ですが、2個体が精子をお互いに交換することで受精し、岩にリボン状の卵の塊を産みつけます。ウミウシは殻を持たないかわりに、毒々しい派手な色彩をして、外敵に「自分を食べるな！」という信号を送っているのかもしれない。

ゴマフリイロウミウシ体長2cm以下



タコの仲間

タコの仲間はイカ類と同じ頭足類といえます。体の作りは胴・頭・腕の順。眼がよく発達し、周囲の環境に応じて見事に体の形や色を変えます。貝の仲間では最も頭がいいといえます。餌はカニや貝など。イノーでよく見られる小型種はアナダコです。青い輪っか模様のヒョウモンダコの仲間は有毒(36ページ参照)。大型種では、胴に白い縞模様のシマダコ(方言名・シガイ)や、腕の付け根に眼のような輪っか模様のあるワモンダコ(方言名・島ダコ)がいます。



マダライモガイ

アーサがたくさん生えていて、くぼみに砂や礫^{れき}がたまっているようなところを探すと、この貝を見つけることができます。薄い黄色に見えるのは殻皮^{かくひ}という半透明^{はんとうめい}の膜をかぶっているからです。殻は淡紅^{たんこう}色に黒い斑^{はん}が特徴的です。イモガイの仲間^{なかま}は全て肉食^{じくじ}で、もりのような形の歯^かで狩^かりをします。この貝は岩に穴を掘^つって住むゴカイなどを捕^{つか}まえているそうです。

殻長4cm



フタモチヘビガイ

太い管^{くだ}がとぐろを巻^まいたようになっていることからヘビガイと呼ばれる仲間^{なかま}です。でも、この種はサンゴに埋^うもれて生活し、端^はのところしか見えません。動き回^{まわ}ることのできないこの貝は、ちょっと変わった方法^{かた}でエサを捕^{つか}っています。潮が満ちているときに、口^{くち}から粘液^{ねんえき}の網^{あみ}を出し、この網^{あみ}に引っかかったプランクトン^{ぷらんくとうん}や有機物^{ゆうきぶつ}をたぐりよせて食べるのです。

殻口の直径2cm



イガレイシガイの仲間

レイシガイの仲間^{なかま}はたくさんいますが、中でもこのイガレイシガイの仲間^{なかま}は殻口部^{かくこうぶ}にぼつぼつした突起^{とつき}を持^もっています。背中側^{せなか}は地味^{ぢみ}で、周囲の岩と大変よく似^にてカモフラージュ^{かもフラージュ}されていますが、殻口部^{かくこうぶ}はきれいな色をしてしています。キイロイガレイシはやや扁平^{へんぺい}で、腕^{うで}が2本突き出^でたような形^{かたち}がユニークな上^{かみ}、軟体部^{なんたいぶ}も真っ黄色^{まっきいろ}。ムラサキイガレイシとアカイガレイシはごろっと丸^{まる}く、殻口部^{かくこうぶ}に太い棘^{とげ}がいくつか出^でます。ぜひ探^{たず}ねてみて下さい。

殻長2.5~4cm

殻口側

背中側



キイロイガレイシ

ムラサキイガレイシ

アカイガレイシ

ニシキウズガイ

かたい貝殻をもっていますが、身がおいしいのでよく採集されます。殻が貝ボタンの原料になるタカセガイ（サラサバテイ）の仲間です。似た仲間が何種かいますが、本種はやや丸みを帯びた三角形が特徴です。狭い貝殻の口から大きな軟体部の足が出てきて、しょうかく触覚を伸ばしてはうように歩く様はまるで海か底探査ていたんさをしているようです。我々が食べておいしい貝には藻類食そうるいしょくが多いのですが、この貝もやはり岩に生えた藻類を餌にしています。

殻長5cm



ニシキウズガイの顔

サザエの仲間

サンゴ礁の岩場に生息します。本土と違い、沖縄のサザエ類に棘やこうせいはありません。夜行性で、昼間は岩影に身を潜め、夜に出てきて岩の表面に生えた藻類を食べて歩きます。外見では雄雌しゆうの区別がつかみませんが、軟体部の一番奥、殻のてっぺんに当たる部分に生殖腺せいしよくせんがあり、緑ならば雌でこれは卵の色、白ければ雄です。殻口には石灰質の堅いふたがあります。ふたの内側にあるうずまき模様は、殻とともにふたも成長していったしるしです。

チョウセンサザエ殻長8cm



チョウセンサザエ

コラム
COLUMN

打ち上げられた貝殻

海浜やイノーを歩くと、たくさんの貝殻が落ちています。中には、生きている姿がめったに見られない貝殻もあり、その海に生息する種類を教えてください。また、イノーに落ちている巻貝の殻には海のヤドカリが、砂浜に落ちている殻にはオカヤドカリがきっと入っていることでしょう。彼らは成長とともに大きな貝殻に交換していかなければならず、いろいろな種類と大きさの貝殻しげんはヤドカリにとって大切な「資源」になっています。



砂浜の打ち上げ貝



イノーの打ち上げ貝

(伊藤泰人・鹿谷麻夕)